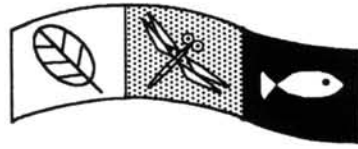


# Rio



リオ ～豊田市矢作川研究所 月報～ No. 30



児ノ口公園（豊田市久保町）での稲刈りの様子 杉山 巨氏 撮影

連載

ちごのくち

## 児ノ口公園の四季

10月 ～稲刈り～



成瀬 順次

10月は稲刈りです。児ノ口に植えられている紫米は、背が高く風雨に弱いため簡単に折れてしまいます。これを防ぐために、児ノ口の皆さんが前もって竹を四方八方に打って縄を張りめぐらしたおかげで、紫米は先日の大雨にも負けず、今年も例年の様にたくさんの穂をつけてくれました。10月の第2日曜日には紫米と少し早い白米も刈り取り、木の杭に渡しハザ掛けをしました。稲刈りの後は里山の間伐です。今夏の雨の少なさのため夏を越えることの出来なかった木々を伐採し、多くの木々が里山を離れました。里山に一人入ってみると周囲の街の喧噪が嘘の様です。これが街の真ん中か？と思う程です。中旬は下町に挙母まつ

りが訪れます。山車が児ノ口公園の横を通ってゆきます。まつりの人達、綱を引く子供達のにぎやかな声、そして本楽の早朝には「おこし太鼓」が街のシーンと静まりかえった中を風に重なってかすかに聞こえ、近づき又遠のいてゆきます。まつりが終わればいよいよ本格的な秋。児ノ口に秋色の到来です。

(なるせ じゅんじ)

### 10・11月の自然

栗の実、ドングリ、ちご庵横の柿の実が色づき、モミジ、イロハカエデが秋色を演出します。また、モチ米の脱穀も行われます。



# 川端の宿

川田 牧人

長逗留になるんで、近くに安くて安全な宿はないですか。西ピサヤ研究センターのスタッフにそう頼んだ私が案内されたのは、「川端の女王の館」という名の宿だった。名前の由来は、キングでない第二の都市というニックネームからきているわけだが、もう一方の「川端」というのは、文字通り川端に半分つきだした形でバルコニー状に設えられたカフェがあるという建築上の特徴によるものだった。フロントの前を奥まで突っ切って、港に注ぎ込む河口部にせり出した川縁の特等席につくと、涼やかな浜風を受けながら上り下りする荷船や漁師の小舟を眺めることができる。やることのとくにない午後の間中そこで過ごすのも楽しみのひとつであった。

そのカフェは、夜になるとレストランとして夕餉を供してくれる。さすがに宿のレストランはと最初は敬遠していたものの、一度は試してみるべきだと夜にもテーブルについてみたが、値段もべらぼうではなく、大学から一旦帰って再び出かけるのもおっくうなときは、ここで夜も過ごすようになった。ただ、夜は結構人気で、川縁の特等席は先客に占められていることが多かった。もうひとつ、フロアの片隅でうらぶれたバンドが切なげな音楽を奏でるのだけは勘弁してほしかった。メインボーカルの女性と、その隣のパーカッションの男性はたぶん夫婦である。ほかにバックが3、4人いるが、行き場のないサーカス団のような衣装と満面の笑みは、明らかに演奏テクニックとのギャップを強調するものだった。選曲にしても「ベサメ・ムーチョ」などのラテンナンバーや50年代のアメリカンポップスというのも、まるですり切れた古いレコードを無理矢理かけているみたいだった。要するに彼らの演奏によって、うらぶれた場末の安宿という、しなくてもいいロケーションの強調がなされてしまうのだった。

ある夜、たまたま例の特等席が空いていたのでそこを陣取った。午後の暇な時間には私の指定席でも、夜にその座を占めるのは初めてだったので、満足しかけたのだが、あのバンドがまた演奏しているの、ちょっとげんなりとしながら黙々と食事すすめた。料理は特段まずいわけではなかったが、あのバンドが流れているとスープはたちまち冷め、肉はたちどころに身を引き締めてしまう

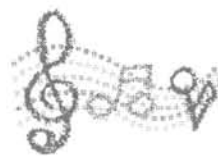
ようだった。

そんなわけでしばし堅い肉と格闘しなければならなかった私は、食後の落ち着きも手伝ってその特等席の特権を思い出した。バルコニーの欄干越しに川に視線を移した私は、しかし異様な光景に息をのんだ。水面が動いていたのである。それは波の自然な動きではない。いい警えではないが、たとえば地下道の床一面にドブネズミがうごめくように、もそもそとした動きである。目を凝らしてみるとそれは、小舟に乗った漁民たちであることがわかった。何艘もの漁舟が、ちょうどバルコニーの欄干の下あたりに詰めかけていたのである。

このカフェの構造が川に突きだしたバルコニー状であるということは、客にとっては川を見下ろせる展望台なのだが、川から見ればちょうどまい具合に張り出した舞台に見える。漁民たちにとっては、川を伝っていけばカフェに入場することなくバルコニーに達することができる。集まった漁民たちは、そうやって毎夜演奏されるバンド演奏を聴きに集まった聴衆だった。川は彼らにとって無料のルートを提供し、バルコニーの下は絶好の天井桟敷となるのだった。私が自分で決めていた以上の特等席がそこにはあった。

私が心底辟易としていたバンド演奏を、彼らは無上の楽しみとして夜ごと小舟を走らせてくる。そうして灯火を消し、発動機つきの漁船は音を立てないように停止させ、舟の上で慎ましやかにしかしのんびりと、一日の漁の疲れをいやすのである。私は漁民の楽しみについて想うようになっていった。

(かわだ まきと、中京大学社会学部 講師)



# 矢作川観察ノート

## (8) 矢作川・古巣水辺公園の壊滅と復旧

新見 幾男

矢作川河口から44km地点左岸の古巣（ふっそ）水辺公園が、去る9月12日朝の大洪水で壊滅的な被害を受けた。それから約1ヶ月間の前半は、河川敷に堆積したヘドロに邪魔され、人は水辺に近寄らなかった。後半は廃墟のような水辺で呆然としている人が多く、復旧は話題にならなかった。

10月15日の日曜日、矢作川漁業協同組合の今年3



重機のバケットに乗って枝にかかったゴミを取り除く

回目の定例河川清掃が行われた。普通は小グループにわかれ、担当区域を清掃するのだが、この日は近隣のグループが古巣水辺公園に朝から集まり、倒木やゴミの片付け仕事を始めた。午後は古巣水辺公園愛護会の人たちが居残って、重機やチェーンソーを使い、上の写真のような「高所作業」を続けた。冬がくるまでには、傷だらけのままであるが、古巣水辺公園は清潔な姿を取り戻すように思われる。

そのあとに、岸部に立った人々が土木技術的な「復旧」を構想するのだろうが、右の写真のように現地の傷は深い。洪水に対する安全の確保、新しい河川景観の創造、生物棲息空間の創造の三つを同時追求することになるだろうが、豊田の近自然河川工法思想・技術は、これに応えられるだろうか。

古巣水辺公園は、上流の山間地から続いてきた堀割河川が終わり、下流の平野に向かって堤防河川が始まる位置にある。9月12日午前8時～10時の約2時間ほど、この位置の矢作川は毎秒2,400トン台の洪水の直撃を受けた。そのピークの8時半～9時頃に、洪水は古巣水辺公園の区間で堤防を乗り越えた。われわれの世代の記憶にはない空前の規模の、また異様にピークが短時間の、大洪水だった。

この大洪水で、古巣水辺公園約800メートル区間に配置された巨石水制工9基のうち、最上流の2基が大破した。3基目は中破した。4基目は先端が沈んだようだが、まだ水が白濁しているので被害状況がよくわからない。5基目から下流はほぼ無事ではないか。

子どもが水遊びできるような遠浅だった水辺が、下の写真のように1～2メートルの断崖状になったのは、大破した水制工付近である。その前の河道も深掘れしていて、水深が1～2メートルもあるようだ。これより上流にも深掘れは続いている。

河道の滞筋が大きく左岸へ移動した。その移動距離より大きく、公園前の中洲が左岸方向へ成長してきた。だから公園と中洲の間の川幅が狭くなった。中洲の向こう側にあった小川（分流）は玉石で埋まり、消滅した。中洲が中洲でなくなり、右岸からの陸続きになった。

今回のような超大型の洪水がくると、この位置の矢作川は左岸へ左岸へ走りたがるようだ。洪水がもう1～2時間長かったら、公園のヤナギは全部なぎ倒され、そこが滞筋（みおすじ）になったかもしれない。敗戦直後の頃の本道（ほんとう）は、そこを流れていたという。

そんな性格の古巣水辺公園の矢作川を、どう修繕したらよいか。ある酒の席で、関係者が本心を語り合った。異口同音に「本当はもう1～2年放置し、川が川をつくっていく姿を見たい」と言った。近自然技術者のバックボーンにはそういう感情があるのだろうが、現実の復旧着工はこの冬だろう。彼らはどんな設計図面を描くだろうか。

(にいみ いくお、矢作川漁業協同組合 専務理事・豊田市矢作川研究所 事務局長)



水制工が崩壊し付近の遠浅上の水辺が断崖上になった

